

萱野さんからの贈物

福地 康子

萱野さんには大学の特別講義で始めてお会いし、その後、登別の熊牧場や二風谷資料館でのチセ造り、アイヌ語教室の山菜採りのなど、何度かお話させて頂く機会がありました。勿論、とても著名な方でしたので以前から存知あげていたものの、その偉大な業績から、まさか自分がお話できるような方とは思っていませんでしたが、実際お会いすると、とても優しい口調とその物腰に心奪われていき、特にアイヌ語で昔話の一説を語ってくださる萱野さんの声の響きに、聞きはれてしまったその感覚は、ごく最近のことのように思い出します。言葉の一つ一つがとてもあたたかく、心の奥にそっと入り込んでいくものでした。

私にとって萱野さんとは、人間としての生き方の道理を導いてくれた、とても大切な人です。恥ずかしながら、元々、自分の生まれ育った文化というものにさえ疎かった私が、留学先で様々な文化の学生達と出会うことにより、日本の文化というものにも改めて関心を持つことができました。そんな時に萱野さんのお話は、アイヌという文化を通して、ただ知識や技術を身につけるということだけではなく、もっと重要なことが身近な生活の中にあることを教えてくれました。萱野さんが語るアイヌの昔話や、子供の頃におばあさんから伝えられたお話は、自然と共に生きるアイヌの教えの中に、現代社会で育った私たちに大きな気づきを与えてくれました。アイヌの主食であるサケを採るのは、産卵を終えたものだけ。山菜も必要な分だけを摘んで、ちゃんと他の動物たちとも分けられるようにと、自然の利息だけをいただく。その考えは、「自分たちさえ良ければ」という無意識のうちに、いつの間にか陥りがちな感覚から遠ざけてくれるような気がします。

そして何よりも、家族の暮らす「いえ」を研究テーマとし、どういった「いえ」に暮らすのが心地良いのかを考えていた私にとって、大きなヒントを与えてくださいました。大学に入り、「いえ」の設計を考えるようになると、雑誌などで見る斬新で新鮮なものばかりに目がいき、留学先で本格的に設計演習をしたときには、コンクリート造のシンプルでモダンな光と影の絶妙な組み合わせと、それぞれの空間には小説のようなストーリーがある家を目指ようになっていました。ところが、何かが違う、何かが足りないことに気づき、日本に帰ってからは人が暮らす「いえ」とはどうあるべきものかと、ようやく考えるようになったのです。コンクリートのシンプルでカッコいい家も良いけれど、木の家や、自然素材に触れているとなんだか心が落ち着くものです。だからきっと木の家が良いには違いないがそれは何故だろうか。そんな疑問を持っている時に、その土地の風土に根ざした基層文化という考えに触れ、北海道の気候風土に根ざした暮らしの中で、自然環境と上手に共生しているのがアイヌの人々の暮らしであることを知ったのです。そこには、自分の暮らす土地のものをうまく利用し、自分にも周りにも無理をかけない自然体の暮らし方がありました。

核家族、高齢化社会が進み、共働きの家庭も増え、少しでも子供達と一緒に豊かな時間を

過ごすためには、より便利で快適な技術の進歩も必要だと思います。しかしながら、子供達を育てていく親が私たちの世代となり、暮らしの中に自然とのつながりを実体験として感じる事が少なくなった今、萱野さんがお話してくださったアイヌの思想がとても大切だと改めて実感するのです。私たちと同じ大地に生きる植物にも動物にも生物にも、全ての生あるものに感謝の気持ちを持ち、皆が共に生きていこうと考えることは、人間と自然環境ということだけではなく、現代社会では人と人とのつながりにさえ大きな影響を与えてくれます。自然に対して優しい心で接することの出来る子供達は、周りの人に対しても優しい気持ちになれるのではないのでしょうか。

「いえ」と環境問題をリンクさせて考えるのは、当たり前のことであっても、その本質に目を向けることはとても難しいことですし、私自身、「いえとは？」という疑問を通して、暮らしの基盤について考えようとしなければ、萱野さんのお話が自然と心の中に入ってこなかったかもしれません。子供の頃、祖父母が農業をやっていたこともあり、畑で遊んだり山の中で蝶やトンボを追いかけていたことが、年齢を重ね様々な経験の中で世の中の矛盾を感じたときに、原点に戻るきっかけとなったのかもしれません。

今、こうして自分の夢だった「いえづくり」を仕事とし、心にも体にもやさしい家、家族が心穏やかに暮らせる家を目指す中で、本物の木や自然の素材に触れてもらい、その心地良さを感じてもらえる場をつくっていければと思っています。そのように、自分の目標を設定できたことが、萱野さんが私にくれた贈物です。ただ一棟でも多くの家をつくりということではなく、自分たちの暮らす自然環境そのものに意識を向けた家づくりを通して、少しでも多くの子供たちが、自然との触れ合い経験し、様々な学び・技術の習得をしていく中でも、自然との付き合い方を忘れず、現代社会のあらゆるひずみ、環境破壊などを少しでも軽減できる力になってくれればと思います。

最後に萱野さんのよくおっしゃっていた「自分の背負った荷は重くない。」という言葉。とてつもなく強い意志で、アイヌ語を絶やさぬよう勉強され、社会とも戦い続けて文化の継承に努力されてきた姿。そしてそこには計り知れないご苦労があったはずですが、それにも拘わらず、本当に無知な私にも分け隔てなく優しく語り掛けて下さったあの姿は、いつまでも私の心の中にそっと居続けてくれるでしょう。この大地で共に生きていくために、家族の暮らしの中にある本当に大切なものを気づかせてくれたこと、また、それを追いつける目標を後押ししてくださった萱野さんに、本当に感謝しております。

室蘭工業大学 建設システム工学 修士課程 2003 年修了 福地 康子

e-mail : yasuko_f77@hotmail.com